

# J.S.V.R.

# ニュースレター

# No.19

2012.10

発行人 日本バレーボール学会  
会長 遠藤俊郎  
発行日 2012年10月31日  
事務局  
〒444-0005 岡崎市岡町原山12-5  
愛知産業大学 後藤研究室内  
TEL.0564-48-4511 FAX.0564-48-7756  
E-mail : jsvr@asu.ac.jp  
<http://www.jsvr.org/>

## 日本バレーボール学会

The Japanese Society of Volleyball Research

### 巻頭言

会長 遠藤俊郎 (大東文化大学)

2012 ロンドン五輪バレーボール女子3位決定戦。日本は、韓国をセットカウント3-0で破り、1984年ロサンゼルス五輪以来実に28年ぶりとなる銅メダルを獲得したという大変うれしいニュースは我々の記憶にも新しいことでしょう。試合直後のメディアのインタビューへの眞鍋監督のコメントは「本当に選手12名、すごかった。当たりましたね、迫田。今までのデータで韓国戦は迫田が一番よかった。大活躍でした。3年半やってきたことをやろうと、それだけ。選手には厳しい練習かもしれないけど、メダルを取れてよかった。選手とスタッフに感謝しています」(朝日新聞2012年8月11日)というものでした。眞鍋監督といえば、試合中タブレット端末を片手に、アナリスト等から刻々と送られてくる試合の技術情報を基にした選手への指示等、データ重視の理論派としての印象があるかと思えます。このスタンスが、対韓国戦でも固定された先発メンバーではなく、戦況に応じた選手起用に生かされていたと言えましょう。

また、眞鍋監督はバレーボールの指導現場では珍しい技術別等複数の専門コーチを採用したことで知られています。「餅は餅屋」という考え方を実践したということでは極めて革新的な実践とすることができます。

このようなことから考えると、バレーボールにおいてはどちらかというと監督が自己の経験を主体にすべてを取り仕切って事を進めるといった印象が強かったこれまでの指導体制から、各種専門家集団を監督が集約する形で、得られた客観的情報等に裏打ちされたより科学的・合理的な思考に基づく指導体制への変革を印象つける銅メダル獲得であったと言えるかも知れません。

しかし、もちろん眞鍋ジャパンも全てが順調という訳ではなく、一時は攻撃の速さを追求するあまりスパイカーに窮屈な思いを強いる結果となり、全体的なオフェンス力の低下を招いたこともありました。これは攻撃の速さを「低くて速いトス」に固執したことに起因していました。JSVRでは『Volleypedia(バレーペディア)改訂版 Ver 1.2』を2012年4月28日、日本文化出版より出版いたしました。その中で攻撃の速さに関する考え方をセッターのセットアップとスパイカーの動き出しとの関係から「テンポ」という概念で説明し、攻撃の速さはトススピードやトスの高さから生み出されるものではないことを指摘しました。また、7月に東レアローズ男子バレーボール部の協力を得て三島で開催された2012バレーボールミーティングでも話題提供者に渡辺・手川論客を迎えて、「ファースト・テンポは『はやい攻撃』なのか?!」というテーマに100名を超える参加者と共に「テンポ」について熱心に議論しました。

バレーボールの指導現場において、今後スポーツ科学の応用は不可欠であり、指導者のみの努力だけではその変容に追随していくことは至難と言えましょう。幸いなことにJSVRには多くの熱心な会員がスポーツ科学の進歩に目を光らせていますし、自身でも新たな観点から研究を進めております。もとよりJSVRには指導現場と研究現場は別物という発想はなく、日本のバレーボール界の発展に如何に寄与するかを求めています。今後会員各位の協力を得る中で、必要な情報発信を積極的に進めることにより、バレーボール界におけるJSVRの認知の向上と貢献力のアップを益々図っていくことが肝要と考えております。

加えて、2011年度よりJVA指導普及委員会委員長にJSVR前理事亀ヶ谷純一氏が就任しました。JVA指導普及委員会では毎年、コーチ・上級コーチ・公認講師研修会を開催しておりますが、JVAと亀ヶ谷委員長の格別のご配慮もあって研修会の幾つかのコマをJSVRの会員が分担して講義する機会を頂けるようになりました。このことは、国内のバレーボール競技統括団体としてのJVAともコラボレートしながらJSVRの保持するシーズを学会内に留まらず社会に還元していくまたと無い機会に他なりません。

1996年に創設されたJSVRもいよいよ20周年を迎えつつあります。ここで改めて基礎科学としてのバレーボールの様々な原理・原則に関する研究のみならず、競技力の発揮・向上に関わるサポート科学としてのバレーボール研究もJSVRに求められる使命と再確認しておきたいと思えます。